特別
へ7
5167
6

へ7
5167
6

月瀬文庫

野宮

伊勢の神垣潟の法の教への道也

ほとけ八佛なり神ハ素盞嗚なり是といふなり

法の師と神垣と魚ぞくの海といふなり

うを魚ぞくと云潟といひ出るなり法の師ハ

れと見れ共一見ハ僧ぐ野宮多人

逆縁なりまいりて思案なりよ神ハ佛陸魚ぞく

なれよりは海ハ人ぐ神魚のうへのまうぐと

わが身と同ぐ魚なり道とは云義ハ伊勢の

神宮より以西ハ海ハ又日月海ハ六合海ハ西ハ

そこにのをうがごとし仏なる紙墨と根ずとて
法花云質直云柔軟云無諂曲云無濁亜云無
云法華云無垢亜云無濁亜云無諂曲云無
和光云教弥よい法華経云質直云無諂曲
仏神とをしてうとおりなること
しめすとをもしてよりをもしてかなりよいなる
をいうるはめ身れ物をもうるる
仏世と捨人の数なる
文殊師利問経云無垢亜云無濁亜
を云柔軟 今は偽れ字とをもてをもうる

同物よ柔い泥沼の弱木なるるとのをうるるとを
事なるべしうるべく柔れ字畫とをんるに十字世の
字十八の字と合しうるるよ四十八字とをんるなる
仏一字一字悪曰柔与柔同偽字とをんしうる
舎者宝離のるし
涅槃経云一切法世ろ生者皆帰死盛者有必衰合者
有別離云有法者者とをんるをもうる法華経和ろ
雲別離者とをんるをんる若れ法一をりるべのる
みるるをもうれのるしとなるをもるるものをを
しやおりるを何事をもひるひの罪よるをもりをもし

分段なれば車の四りゞくいたとえで説く譬喩

六道月清集よりの、べよる牛れわとれだんの
飛うたゞひうゝりひあれんも牛のとゝりゝ撥と
ゝ車れゆ紀うひもゝるゝぞられわとえれわとゝんろ
よれゆくくもむゝひのゝどいゝひまゝるれいゝろんの
つゝゝもゝれゞ業よゝゝうゝれて車とのゞゝ事ゝわ
事とゝゞひゝくゝゝゝゝるゝえひんゝくゝひ紙ゝん家
ゞゝゝ百番れ牛の車れとゝいゝあとゝいゝ泊れにゝゝと
ゝ乳とゝゝ家れ乳ゝ者の会ゝり

ゝゝ居ゝ生入ゝゝゝ生死の道と神ゝ変ゞやゝゝん
ゝ居よゝゝゞゝれ祝ゝれよゝもゞゝ天れ字ゝ春ゝと
いゝゝ神ゝれ祝れよゝゝゝゝ或いゝ花春ゝゝ云上古の
神門ゝといゝゝ神ゝれ世性他よゝ衛門といゝゝと世伝
ゝゝ居ゝといゝゝゝゝゝゝん部神道の他接と
いゝゝゝ居ゝれゝゝゝゝに神道よゝゝゝの生死ゝ春
ゝゝゝゝゝゝ居と生ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
死門ゝゝゝゝ生死のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
生ゝゝ死のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
不滅の法身ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

神社考へのそうの説ありけれ
ども大くは仏ろ義なりけれ
ども説くこと説くなるべし
車にうち乗る火宅門とや出ぬらん
三車火宅門とは三乗いかりよつまび
くるを火宅とは界と法花経文にも競共純白牛車出
火宅とは凡夫の煩悩の河にくるめくをひとり
くるうるん天台大師の義法華実相と云を
ふと火宅と出るといふと雖も色とみちの
居と出入と生死のことかるるを車にうち
乗りて火宅と出ぬと生死をまぬかれて

鳥と出るとも火宅門と出ぬと入宅の時
も死ぬるいひ逢路をぐ一見をもとひを
つるは此路をりて法のをの道をぐりと
わろ和と首尾をいひかをろ微妙の作云
なるべし

東岸居士

そもそも浮世は竜光和尚の芭蕉泡沫と同じ

浮世とは何事ぞと問へば答へて曰く

うつりやすき古今の伊勢が浦の中はうつひなる

わたり川さらぬの淵そなかれて百年うつ

やとは見るとも浮世とは思はじ竜光和尚の歌にいはく

竜光のあるとも事は柏崎の竜光和尚の歌のうちといふ

くつくとも和尚歌にいはく事は文選云人生如和尚草

氏藻林に和尚歌人命暗脆とあり三代侍賢門沈

堀川がらにも露は消ても着にもとおりもちの
とぞそれなりけりぞおのも此世は電露のとまるぞあまり
ところなれば此縁よりも電光朝露を初めとくとは
いはゞ人の有為といふ人のなくとはきにし事とも有為の経は無
常の有為生死のちまたといふ事あれば芭蕉泡沫
またうき事は万善同帰集中に云不堅如芭蕉
泡無常似焔影電光短影浮生経に是身如芭蕉中
無有実亦如電光不得久停とあり是れ文の心
なれば芭蕉その身もおのよはかぞ蕉といふ名を
うきかずやうかのむくしふかくなるよしに

金かいくりの中納言たまつ者以詠ゆに秋風の
おいぞせとぞれくゞりつてそよぐをわぬ世とはそるとも
泡沫とは言はれたれ者や是れかやとらくと云義と法苑
云世皆不牢固如水沫泡炎汝観心界乗集にも今世泡沫命と
ありて是れ著者も詠ずる世の中をそうやせにおけるみつの
泡のほどなくきゆる老ぞしてもんろ
聴聞といひし萬事は皆自前の境界なれば柳は
みどり花はくれないあれ面白き春の気色や
おまにに東岸西岸士禅家なれば花が別傳れなどといへり
別は説法の聴聞そして外にまことの萬事

自ありようにきりて仏法をそしりて焼失とく焼失といむ
ひみえゆう愛と云へ六焼と業者ぐるにいろて自
柳をそどり死をくれなれ井といそまれ新と山姓
ふもひ事と須と祝法明眼論ふ第本紙仏
樹林祝法の事と論ぞうあるひ義あり
此橋をいう女人はうもを治ろうう橋ゆくのぞ色を
先師自然居士の法界と云縁の功力とうつくしう
治ひ橋をれいとうか柳りもしろ
居士れ事はすおいち自然居士のうひいまうそん
師とは弟子の姉とうぶ橋へ法界とは十法界として

地獄うり仏界まくれゆう流生界とそ
のちうび平等よりびわぐうと色の名は所云所縁
云界数名法界法源云法界者一切流生界
びは界と梵語よは達摩法都といへ法花儀法を
為法界流生ぞくはり云
有縁ういよ及びを縁まくはり流生れ事と
をうれよをり功力ってびは橋とをてくとうすんあう
大明法数三十三巻よ八福田ってを八持の善根とはう
称ういの中の事とは建造橋梁とあつぐうとうあう
事と一ぬびトの称よ云建造橋梁用源法界へ人

病苦之者是為福田トこの心ばえにて法華経の
法をぞ聞きそめたてまつりて人ゆえひあれとおぼえ
人と自性とをしら病者をぞ川にうとあやうま
人数をつくめわが福田とおもと
若士は郷里をいづくの成人は父母と離れ生れ
給ぞや
されば法つくさ高野大師の三密指掌より虚空法界と
いへるの假名を見といふ生死の別いづくの別いづ
も縣の人ぞ子を思ひ子を思ひ妻をぞ思ひ
よ奥てあうへいと男は親の六親は不定なり

ろ天堂と思ひ地獄と思ひ仏と成ぬ
定の別さて親のわづさのあんやとうへ
らく仏ぞう柳文岳別妻姓和尚俾性海吾郷也法号吾
宇也とあるもおのなり父母とこれを出家と八母
親と辞退し出家をうの黄葉帝運師出
家の志ありて出家とのぐれ時を毎ぞうひあず
称く国別大義渡といひ母をうして見れば
ひさうへうとせ時帝運ゐ中にてあとえん
ありて一子出生天と云てうしといい
命りは祝と三教雑論をぞいへるひたのを作ぞ

まさしく伝説なれども
伝説あるべし法花経を聞
祝儀より代々父母起塔婆
うこれ父母とこれをこそ出
棄教の門とこそ
むつかれすと同時に
といふ意見得をれ
なれ言わるけやうぐる
うこそうのふらの
母の事とうひもう事

てこそ仏名を唱ぐ
なと同じ
なるかよこそ
法華経新出
記才文云我
わりこそ
教とこそ
教滅和の
是不
こ男教

事にこそ
りはなれば
重剛般
所
摩
動性
所法
法花の
法華経
名為
夫より

て髮をそりもぶ〻の芸深の袖をしぼりて出家をとゝ
どもう絶入をげり〻る事をそのよ
りの秋の夜の月をとそとゝ出さうを引れ人をやり〻
もを家れ火宅を出るものの〻ぐ〻にいるゝを
今来居士をとゝ下りよるやうれ義をとまゝて過
者をなし
出家りの〻秋の髮をそるゝを衣を云り深も世で
墨をのづるゝ居りを入く
ゝを居士れ招道をいゝを本来れ多をまゝをそゝ
抑ハ孫光ハ紀をとゝ人をそゝ一筋の白ゝ義芸ゝ出の

本来をとゝ多ゝ古今為曲集をいゝるものゝ多世
ゝ多ゝ袖れ白ゝの合ををまゝにゝるゝ〻ゝをなど
多をれ〻とゝをゝをゝ芸深ゝ芸世の律
ゝれ本れ多の仏法をれ中にゝ芸衣今れ世の律
都をゝにゝ高芸れ多ゝ芸風をゝ芸ゝれ法の中れ
芸多なゝゝ問芸ゝ多れ衣を本業多れ衣をの二種を
ゝ今律都をゝにゝ芸ゝ芸ゝ事なりや芸本業多ゝ律
宗れ法五の袈裟をゝ芸ゝ事をゝ偏衫裙ゝ用ひを
ゝを多ゝ袖多れ多ゝ似ゝ衣ゝ芸ゝ芸ゝ事をゝ芸ゝ
ゝ芸ゝ中をゝ芸ゝ事をゝ芸ゝ

を僧まのわうとうをもうし天台宗の宗旨戒の袈
裟は偏衫袴は紫衣なれども堂塔にもるる末
葉なれとも勇ゆり者りの山門の宗旨戒職とわづら
僧はたづねはべ結きべば宗者は世界を檀法大事とう
て宗門とうげ僧侶とゆうるあり結白は法衣を袈
裟を意を為事のとうとうやうれ事をれば仏
法は世法とうとうねいたくめ事ときまとうとうは為
者付門人非法婦書序曰宗家智名縫曰十二章法師
賜金服とうひ同じ宗人は付とうれ書曰昭岡西
遊象都遠蒙宣召縫演復賜命衣源為吾門之義事也

とうとうの宗門教法孫五宗に分れとうとう和家とうとう事は
僧侶は眉目をうべ僧侶教大師をば師新めをれ
家とうとうとうとうとうとう同今は律宗は比丘を
沙弥は一格の袈裟と者すは善の事をうと比丘を
葉の袈裟と者沙弥を為袈裟と者とう事いうん
若比丘は老者なる者は袈裟と似をうと末世の事をれば
佛の仏作法は沙弥をうべ事と是は南部の宗大
寺は僧の相伝をとうとうとうは亜をうのうめく
なるもう事をうをとうとうは律宗は僧の六物を
と縫法をうと乳門勝法者は多くん法は法の行記

衣を似せうの衣に製作し、袈裟と看用し、ひろ佛に制戒を
ふる本業に皮の黄汁を染めさせ給ひ、
衣をすべしとおもひ給ふ事、
ちからもおよばぬ事なれども、
とかくすべきやうなければ、
かりに法然のすがたにして、
善とおもふ事をまぢ和し、
本来智とすまり給ふ。
うたがはしきことを問ふ佛に法義を問ひ給ふ。
善とおもふ事をいかにぞや。
答へ給ふ。

ものをいふ人を對して、
ものをいふ人をもとより
ものをいふ人をもとより
子細なる人を次に知識とすべしとて、
老子還源篇云、
故聖人云、河上公注曰、棄智無知、無為無覚、
すてゝ知ることなかれ、
無事を業とすべし、
ひとつとして結句
無為なるべしとて、
の修道なれども知識とも
無為に殺されぬ知識とまりて、
殺生を為ぬ仏道

人といふ名聞なるべし

彼岸といふ法はいかなるや

答法師云彼岸涅槃也涅槃岸也彼岸涅槃岸之有
名我是於彼方備我得之耳とは彼岸とは
涅槃とは生死のまよひを出て涅槃川
を渡て涅槃のきしに着とは事へ出
はじめてはゆかりてさとりを開やうのよい
世とは川除をこの明を云よつて是を境やうのよい
わるどの仏果をわりさを海おもてを名ぶたをとは
事といふとは我おぼ海をひの境地の岸とは明へ
くらをさとりの地をもて西と彼岸と名づけをとは

狂云法治とは仏法治乃真の道を入
明師云以狂言法治之張為仏法治乃真の道
白樂天が治也狂云法治とは実治をもて
法治とは狂言をもてこの法治
法とは東岸右之狂云法治とは仏の法治と法
しをて法治はいかなる事とやうをえんやして談ひて空也
やうをといふ仏法治乃真の道をも入
仏とは仏とかしらとは法事めざりにを仏
の頂仏偈なをして仏の功徳とをめぐる事あり
法治とは名聞加遠義絶二云言法治者仏自心

中所宿之法度入切衆生心名之為悔此法能捨衆生
煩悩業苦名之為悔ト云ハ悔ハ云ハ悔ハ云ハ悔
かなしく仏の御法ぞ流むひろまり出て衆生ハの
うらは入ると云悔ハいろいろ悔ハ
ちくさぐさの煩悩悪業とをくくをもつ
くいもをぐ悔法悔ハ
よ祇をさうを牧云悔
とをんとを表の道ハ
をれ道ハ入ぬ
いとをくを祇の名ハ入ぬ

御法の舟ハ
清き宮殿ぞ
ぞはちとぐ
ハ大船ハ
ハ磨人橋擢
温槃大乗宝船
未名曰善上船師
ねはのうの毛筆
ちはりを法人
毛もを大般温槃経の

なるとうけたまわり
簡〻の願成の道理は今に絶
四相及ひ一切は孤生とうけたまわるとは
どていはきは簡〻の願成とうけ時は簡〻というず
しくれんへ万国をでいへ
ねんへとうり業未来土森羅万像の一簡々々よ
みる事如法明れ知りが内とうの成就してかしこ
けうの事をえへそれと道もぐに今りよきしまあ隙を
いなり
但西像もぐくりよれる事仏法は生と死とり

それ仏入滅後に付て正像法末法の二時に
ならう事といへ第一は正法とは正の字は純の字
義とりて完生れさとりれわうの事を法住記に
よりれば仏阿難よつげ給て我入滅してのち正法
一千年なんのありしと女人は出家をゆるす
たりよ百年つゝまりて正法滅して入百年せり
わうんとは女人とは姨母の憍曇弥をでと出家を
り事を付仏は女人と度もとる事を大よろこひ
給ひて乗三辯退しの事釈迦仏のんとうり
いまは世にも戒律のたゝしき僧をでは女人と度

くわ[illegible]しる事とうけ[illegible]ふ事ハ[illegible]
いそれ[illegible]とうべ[illegible]たぐし善見論の説によれば正像
仏法ハ[illegible]の初めより八敬法といふ事いまし[illegible]めとしたのひて
[illegible]りもれ[illegible]ぐ[illegible]ぐ正法千年に[illegible]りしとあり又法華
除林の説に後五百歳[illegible]
[illegible]り第二に像法とハ像の字ハ似の字なれ義にてまぎ
仏ぬ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]法ハ[illegible]
我滅度の後像法千年[illegible]
[illegible]

[illegible]りとあり第三に末法とハ[illegible]
世にハ[illegible]
の阿羅[illegible]
苑に[illegible]
今ハ三義れ説のうち[illegible]
[illegible]れ[illegible]
ひうちひと[illegible]
年[illegible]
法千年末法万年[illegible]
[illegible]像二千年[illegible]

事なれいま来迎に入て三位百寮みな悲しみ時ならず生
と変ずるとは心うべし仏像の三尊の事南無
釈迦牟尼仏文殊普賢菩薩
ひろげめぐりまいる菩薩秋来れども
花とはうつる月とはいとうくもの
ひ来迎の悲世に生と変ずる事なれば人のこれ
なき見れば春過ぎ秋来りつるよつもて光陰のうつるの
ごとく人の命をつづむるとはいとうくもの
よのうべき事なるを生離の道よりてこれ
也生離といでたるとしへ生死と出てたる

也て涅槃経にもこれ道もこれ事なり
かくて月とはいとう門実頌にはくもぶく書百花
わり変衰風わり秋月わり春雨わり冬雪
ふれまくてふれつるわ色ふ
月はふれくもいろ
しつやとは汗と高名とはみぐりなる名とよむ
花落れはいつとなく煩悩のこもりつる仏性
光時雖く生死の海はいとうくもの
して春の月宿りて
花落れはいつとなくこれ事なり

罪垢山よりいよ〳〵たかく業障海より深し煩悩の雲
といふハ人々の悪念を雲にたとへたるなりさてさゝ雲とにまざりて
難有く仏日をもえとらるゝことなきつねよりてかゝる
なれば仏日といふ佛を日にたとへて十六觀經に唯願
佛日としるの事と天台大師釈して佛様破壊
衆生癡闇如日除冥故言佛日とあり衆生
の愚癡のやみをはらす事を佛の慈悲にたとへたる
むかしの事天の日の光て照すをとてらさぬくなき
なり仏日といふ今又ひの佛日といふハまことに如来
とおもへしかうしといふ法花經の恵日大聖尊

とありまた釈にもいふ又ハ佛日ハまれにて雑ものハ自
性本明とおもへなりされハ煩悩の雲をはらつさばさ海
またくおれどもおれどもすゝく又生死の海といふ生
死ハまよひのうへの事海ハ方便の至のおぼろく元驗
も金剛経に序とあるとて衆生生死海中に淪
没して頭出頭没すといへりたとへハ魚などの海の水に
うかびてハしづみ又水中にいりいりなどもするがごとく
に衆生も上界へうかみわが下界にしづむ時
もあるハ海ことに海の中よりあらはれ海のふかき無明
波といふ忽然念起名為無明と起信論にあるがごとく

何の子細とか云ん八歳の年名ばかりにて八歳の
時ばかりにて俗にはなり出て今をもむとなるべき法華経
後とく波羅奴国の人なるべきなり
いかにまいれば月氏とやどうんとやどうんとやどる事
の歌和一朝の月明光の生国東波羅奈
といへる句にて考ねばとぶ〜
生とうまれより法をとく者よりうまれとあるは死りの海
より法門をとく聞をうまれとうまれ
無常迅速の下に云若人約若浅樂入樂浅明入の無人約
無浅若人若浅眞入眞涅槃仏知者滅仏知再法花ゆと
浅眞入約眞永不受佛名とは此の経の心は
佛ばかりを〜はなれてはなれて若根とつとむるものはなれ
ばかりにてはなれはなれはなれ人多く仏の
みのりにさうひく事とあるのはなれとうとうとうと
はなれとうとうとはなれはなれはなれて事なるとは
なれはなれて事とはなれはなれはなれはなれ
はなれはなれはなれはなれはなれはなれ
はなれはなれはなれはなれはなれはなれ
死して空を速はなれ事人なるはなれ死して空はなれはなれひの
やうにはなれはなれはなれはなれはなれ畜生餓鬼地獄なれば

次第に人とはうけがたく得がたき大論一第六十三に阿含経
第二十二に云 云何貧窮 独有人生卑姓家
旃陀羅家 魚猟家 及余種下賤工業家 貧窮顛頓
復作卑賤之業 乃至為人作使 是名貧窮中復
於身口意悪業懐令縦横 生悪処 捨悪更悪 名為貧窮
入貧窮 此経は一種の人ととなり一種の人は死よりうまれ
よ入る一種の人はあの死よりあの死を入る一種の人は死
る死は入る一種の人はあの死より入るもの文
また死よりあくるうまれふうも今こそいへる
死してきさよくわれの第一種の人

六道はちまたにハ迷の前なる生死の窟にて宿る所極も
なし生死の輪転ハ長夜にやいえんまよひつとやせん
六道といふハむかしのよりむなしきつよハ地獄なりとやさらに地
地の下よりあかるき鉄囲山といふ山のあひに八寒八熱などいふ
獄あり極重の悪業をつくる衆生ハかならずこれにおもむく
二つにハ餓鬼道なり餓鬼ハいろよくふかくして罪業をつくるもの
なりそのかずハ劫をふれども一滴の水もいたゞかず
次に畜生道なり人道の都をさることふかくしてあへりそうらん
きゆ及ひ膿血大小便などをあらひくらひてなをあきたらず
是ほどに次ほどあれよりハ食事なくさまよひてすぎ

五十四

五葉とつくるもわりをいへる慢受の衆生の極く下劣なる五葉
和盆供養はまろうしをきこしよりこれは畜生界といふ毛と角
よりて角とりわづらやうれものゝうるづれ鼠中れ
わるやうるひは羽わり翅あり或いは足のうるはりを足
なるはり或いは音ありてうくびもろりのもわりみよ
もしの法とうるめそうとをもうづひきあくわづ
てうぞうみを流生れ身中して毛蔵れ毛をうれ
うるかりよりしく事へはりよの法華道へ縁意図偈の
術へは長と用うりてこ十三天れわうづ帝釋天王と
まはうづえんとて大海れのうるよう須弥山よりとけ

て九百九十九れをにく同はよれ天の蓮華とうど毛
四大海のも一はりは法さづうして帝釋も大はうづ氣
多く蓮りよを猪員とうくをのづとうへうる事へうう
れりのわつまりのうれと法華道とうへこれいを法をう
れの稲葉もわはく他りは海さへん事と称づひへれ苦と
法とうとへくい猪りよを称こうはく紙慢ありくを風
とあへとびへとうへんづわるづうしひうりとうや
天王別集をづはんをこうりよりは人乃道とかをづよ
月れあの事へ寿八苦りよまあくをて一日を仏れやをう
なり事をれ寿のあり海とをはのづう六よ天

道とは者もなく能もいつくしき定敬れよ能力天
地と出現し身れば天衆と義と言葉とのうくく
光明とそれも塵をとびうもり稀こにあれしひと
びとも義れくるこやそのうち取りもと上伝法
とこるこれどもこの三道よりおちて言葉れるこれわ事
ろろ沈論りまたこうけ三道と法華ところ事道の
働れどくゆれるひれもそれ事えちまこの働れ言葉
雅かもは達潤之働これ空方どらへ有ともゆわ
ゆり和治りまつれどとあひと道れちまこと流生れま
よりあれ之一和なること生死の能とは生れて死よ

死して生れたる事と能りはたること言葉りは能方
徹切者雅戸能は本旨能とありとおろ花れ門のあれ
りれ前れおくあてわけとろとびれ事こ未にれれ
ろりこうどとおろ能ゆりこれ生死とびれたこれろ
ゆ生どろ門ろ出ろはたとれ死どが門ろ入ろにこてい
ろろこまやどり和れ能いいづこそとこいろこと道
れあびこれれ生死の極りあどろわれ生死
の相変れりこ海のわどかろ事ろ義こうつこと仏
れことこんこまりこと大悟心義あれ有ようあて
ゆろけ世と変そことろろ後こそとわ世あ

とゝ様にありといそんとすれども雲とけぶり煙と消て
後生を弘とぶらむべくもなし
ひ生死の身と来うとぶることきてあたいこまてゝ
いとゝ身死して後生をもとめんと墓のふく火葬とれば
一所の雲煙とぬく塵空しよりのぶるもないづく
よ弘とぶらむ無くもなし法華経験記巻上
消そうしよれの弘なんそしよるべく雲
えんとの間ゝみんなるまとゆるみんの煙あら
消ぬ来いむとなるとも長秋藻よりそめよ
よの煙とけぶりやうけ高根よりの白雲

ふ弘とぶ無熱の焔よりあらぬ世とも紅蓮大紅蓮
むとゝ沈りよとゝ身の事
地獄なくゝ地獄ゝ歎く対る身ゝ
と稲ゝと焔とゝ
地獄の名ゝ無間ゝ紅蓮大紅蓮ゝ八ゝ種ゝ
拔也焦熱大焦熱抑誰ゝ人ゝ事ゝ制ゝ
二種ゝ地獄の事ゝ樹ゝ大海ゝ
中ゝ紅蓮大紅蓮ゝ十六ゝ地獄ゝ
獄篇ゝ考ゝ浮物屋ゝ
紅蓮ゝ人ゝ聲ゝ浮物屋ゝ

無間地獄とぞ云ふ一種は地獄に堕ちて
こがれ焼くこと多劫なり多劫とは
多くの年月なり血の池とは血の海
なり刀の葉とは刀の葉の如くなる
草なり鉄の城とは鉄の城の如くなる
城なり鉄の網とは鉄の網の如くなる
網なり大の字とは大の字の如くなる
字なり鉄の柱とは鉄の柱の如くなる
柱なり鉄の蛇とは鉄の蛇の如くなる
蛇なり鉄の犬とは鉄の犬の如くなる
犬なり鉄の鳥とは鉄の鳥の如くなる
鳥なり鉄の人とは鉄の人の如くなる
人なり鉄の牛とは鉄の牛の如くなる
牛なり鉄の馬とは鉄の馬の如くなる
馬なり鉄の象とは鉄の象の如くなる
象なり鉄の山とは鉄の山の如くなる
山なり鉄の海とは鉄の海の如くなる
海なり

眼とは眼根なり鼻とは鼻根なり
舌とは舌根なり身とは身根なり
意とは意根なり大焦熱とは大焦熱
地獄なり焔とは焔なり

等活とは等活地獄なり
黒縄とは黒縄地獄なり
衆合とは衆合地獄なり
叫喚とは叫喚地獄なり
大叫喚とは大叫喚地獄なり
焦熱とは焦熱地獄なり
大焦熱とは大焦熱地獄なり
無間とは無間地獄なり
八大地獄とは八大地獄なり
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは
八大地獄の中に第六に第七に地獄
の集熱とは

又焦熱地獄とは炎熱地獄とは大焦熱地獄とは極熱地
獄とも云ふなり
びこの業報は無間地獄の次第は法華経集及
観心本尊抄に
のごとくなり
なのおのおのの業報は
有りは地獄は火焔
と焼くなり
れたる人
もろもろの
火焔はひて

いづれもよく極楽ゆかん弥陀の菩薩の御法とハ次(?)ハ[illegible]ぞや

極楽ハ阿弥陀如来の浄土なる事ハ聖教寺に注わり分

弥仏ハ菩薩とい浄土の音楽を奏して舞うたふゆへ

菩薩なりおもて常麻りに注ま

南無之実

南無ハ梵語之語之柏崎ハ南無阿弥陀仏帰命弥陀尊と云事ハ

に注とこ実ハ仏法僧之三宝なれば自然居士の三宝帰依の

心布施とい云ハ泥を筆免ハ仏法僧に帰命し

事御らバ之

なふとあれば寄氷して滝つ心菊法されて一流なる宝か

の門よりいで給よ

後醍醐天皇の大灯国師に羅湯霊無瑜処とい云事を参

悟し給ひといふ御詠にもあらしに氷のとけざれバおのか

じ岩川の水とよみ給ひきろとく飛鳥川と題をし奏

書よのあとりされひぬべくひろそひよりいてとかんしより

憐疏ニ十宗略記に云夫一切の萬法ハ皆実相の一

妙りにて佛と衆生も有情も非情も無そてなし故

とくバ氷の時ハ東西南北不同なれども其体性の水を

見れバ一味に融してりけへるそなみがらし涅槃経

よハ一切衆生悉有仏性とのべ中論ハ諸法実相
成仏とゝ説給ふ法華経ハ諸法実相
悩即菩提煩悩即涅槃とゝ説給ふ天台宗ハ一
念三千とゝ説給ふ第法一如の義をそなへ
ゝ説給ふ事なれハ第法とをつゝ
いつも同じ事なれハ第法一如と云ふ所ハ
事なれハとゝ説給ふ法華経ハ法
華経ハ実相の門よりねんぶつをすゝ
わゝ実相ハ一如も実相も同じ事なれハ一如とゝ説給ふ
ハ実相とゝ説給ふ

ゆゑゝ実相ハ神の実体ゝ説給ふ
わゝ実相とゝ説給ふ門と云ふ実相ハ
法とゝ説給ふ門の字ハ法花宗の
有一門とゝ説給ふ天台大師ハ一門者一相一道
清浄也門得通於所通とゝ説給ふ法
一如ゝ実相門よりゝ説給ふ
とゝ説給ふ
衆生ハ法花のせゝ説給ふ
生死業ハ実相ゝ説給ふ
ハ自然業

作まぐるところの非道と作して佛道はいるといへども
佛法はるのゝ寺をもれしてひさしくもれ玄縫法ゝ
仏法は同うして孔子は結跏趺坐をもつ
じゝ和のゝと吏ゝうゝ後は物はようゝうめる孔子の
仏道めゝて物をもてわるいひ出ゝうゝ出ゝまゝ
髪をもそゝ衣をもて長はもをて嶮をの作
道はいるゝ善とゝんゝくもをまゝ出ゝ
うゝ尼をくわゝ世ゝうゝ

新元興寺

新元興寺は未感縁起にいはく豊浦寺は推古天皇の御建立なり
仏縁の縁はいはゆる寺は天智天皇の御願の仏
像は表日丸明神の御作なりと伝へ聞くもいはれなきにあらず
作の仏とて世ふるくはるはいまは明神の作といふ
めて東大寺真福寺の僧元の三宝のいてまた作りしと表日
作といふ人ありそゝるくりく同宗僧等ふのをもゝ弥勒寺
をもの縁喚解といふ人ゝ後ゝ来をゝ僧書をゝ加の地
蓋蓋はいざるいまて拙乗世界へゆゝ新元興ゝ
私ゝ半何り
法滅殿

無辺の本願海に帰入して本地の弥陀に来也

但向れ文

仏来りて法れしらく

法れ力法とかんめるるものも犯罪業をも念仏の威力をもろ

くくく消滅すると仏法力とハやはり也 玄量寿経の威神力

加如乳力加護是乳加とのりくのごとく弥陀の大乳の功徳力

つくおりくまする

念仏三昧れ道場

念仏をやて餘念れくんのもづうふ取るると念仏三昧とのり也

くりくハ尚麻ト強るる故小罪をも障とハ天竺の師乳法疏

ハ潅頂ハ場れ自道場と所のり 地民菩薩ハ障碍者の新聞

偽居れ道場とものるもくれ道場ハいづれもくめそもの念仏

まする不ると道場とこそ乳法疏に尚坐道場生弥陀教と伝と

まをり

新れ御法

浄土三部経又ハ念仏の事

弥陀れむんハ能をしと聲のこと

まれん

しとも念のこれ生涯とハいとりて為り為ハ弥陀念仏が

れいたくひとも念のこれるこれるもの法生ハ決定すると 玄量寿経の

下巻に云法有れ生安其名号に伝心歓喜乃至一念も乳人也一向乳

往生セントカノリニスキハチエテワウキヤウベキナウスフ彼也即得往生一任ニ不退轉ニとのりしまを会釈是一といふ
解ニよれハ一念とつゝむすかいらひとも名の称名のゆゑ蓮華の濁
りに染まねんとハを極楽浄土生ん と称ぶんの念くわ縁
するとゝはをんすれハ清浄なる蓮花の花中の悪みなゆゑ
とく知ハいとさいやゆゑ〳〵く煩悩業ハ泥のもゝ〳〵をゝぐさを
ゆゑ〳〵数光の多りのすまさ〳〵かんの水も蓮華ハ泥をゝぐ法ふ
ゆゑ花ハさきをれ名ゆゑ蓮生激流中に染泥不同像泥
泥ハうつゝ〳〵どうゝ蓮ハ泥の中ようあて同俗ゆゑ同際
とハをれ〳〵やうにをゝ〳〵ゆゑ別〳〵なるゝとのゝ絶歴
絶ニ必ゆゑ陸地ニ不生蓮花皐濁泥乃生此花とあるゝ法を
六字名号一遍法

十悪依正一遍體

万行雖全一遍法

人中よく〳〵妙〳〵も

六字とハ南無阿弥陀佛ゝ名号とハ称名念仏をゝ名号一遍と
ゆゑ三業万行の功法ゆゑ法ゆゑ和よくゝ十悪依
正一遍體とハ十悪とハ地獄餓鬼畜生酒蓋人間天上殺生盜婬
ゆゑ佛悪ゝ依十悪ハ地獄餓鬼畜生酒蓋人間天上殺生盜婬
の中ゝ〳〵ありていさゝゝくやどのゝ〳〵をみつゝそいふゝれ
ハ佛悪ゆゑハ佛業ゝ依正報といふゝのゝ七寶荘厳ゝ依報ゝ地獄
ゆゑハ罪人獄卒ゝ正報ゝ刀山や劔ゝ林ゝ依報ゝ地獄
て十悪ゝ依ゝ正報ゝ依報ゝ同ゝ同ゝ同ゝ同ゝ同ゝ同ゝ
まゝりゝゝハ十悪ゝ依正ゝ一遍の念佛ゝ解とゝ
ゝりてさゝりとゝ〳〵けハ十悪ゝ

とハもろ／＼の功徳善根もこゝにことりおさまる名號なれハ經に一
遍なりともゑうするものハ一遍說とハ申し說ハさとるとよむ人中
よく好好もとハこれハもし觀經よりいでゝ善導の疏乃ふん觀經
云若念佛者當知此人是人中分陀利花とかきたり光明大師の
疏にハ念佛者人中分陀利花也明むし勝ると釋し玉ひ分陀
利花とハ白蓮花のことえと妙宗鈔にも見えたり善導云言分陀利
者名人中好花亦名希有花亦名人中上上花亦名人中
妙好花此花相傳名蔡花若念佛者即是人中好人人中妙好人人中上上人
人中希有人人中最勝人也されハ法をほ說くに妙法のすくれたる
不染蓮花にたとへ觀經にハ念仏の行者を此蓮花にたとへたまへる
ものなりてすぐれたる人なりといふこゝろを人中上上といひたり

光明遍照十方世界
これハ觀經の文なり此八字ハ弥陀如来光明無量の徳をあらはす
也へりをも願成就して御身よりいづる光十方をてらしたまふ
あまねし十方とハ東西南北四維上下をさして世界とハ八方
の世界をいふなり此ハふさに尚麻に注せり
攝まハ佛も我もなりきり
あまハ能所不二の義に能所とハ能念所念とて衆生の念ずることを
能念と云仏の念をきたまふことを所念とされハこゝろふかく決
定往生をんと安心して申ス念仏ハ能念の我心も所念の弥陀も
一方ともに一体となりていづまでとされともいづまでと仏ともさうれ
差別のまぎらかしき不を能所不二とも機法一体ともふさされを

仏をもうしてもうけりとこそ恵心先徳の親心異邪教なり我身に弥陀
弥陀は我身にと釋し大師法師も心が至誠弥陀は我身に是自
心十方信利不二論為念とこそ恵心又蔵麻も涅槃
三誠心深心回向教乳の種の教
あれは親鸞の心を是の和とはいつゝ三誠心と云実のん
と云涅槃とふくゝひ入てこそ
の涅槃とも我ん身をゆきこまれんとも云ふ法云とも無ふ
く入てぬきぬと云とも釋しまうし回向教乳心と云を悔すべの
一切の善根を弥陀の浄土へ回向して往生を願ずるを信の教
とはあまを種を拾をとりて念仏するこそ大師も種類の人
の最後はたけばの念をまんとのまう

十教ひと教救とうで
往生礼讃に云称名号下至十教一教乳至完は往生又天台大
師も教乳と釋ふて善心お續乳能十念或一念成乳所
は往生とのたまう天台宗恵心立義の念佛の安心釋よりゆう
色よすべゝしされば法後周中にはいらへば十八の本乳の乃
至十念とはり願成乳の文の乃至一念とはる教は十教ひと恵教
とそとへば教とは乃至十念乃至一念とそこへば乃至字の
こと假念十念とも一念とも涅槃ども平等教よこまりくりとう
らいうさたいのちとうりみとうるべきこと
天陳の雲
天陳とは女人の五つのさわりと法花第五に云女人の身に五障

一ニハ不得仏菩提ニ二ハ帝釋三ニハ魔王四ニハ梵王五ニハ
仏身とはりしゆゑ菩提とは文殊十八天のわざ帝釋
とは欲界のうち三十三天のぬし魔王とは欲界第六の王
しかるに三天のうち乃法第四は梵王とは欲界人寿
八万四千劫より二万劫のとき迄のうちは帝王
梵王とは法たう庭上より来法は寶を誘引ひきまとひ四天下をも
ゆり一切の人民より十善道を引ぜむ法は梵王とはしかれど
八万劫より二万劫までは次第に下りてもとりて金輪王飛鉄の
ゆりわるゝは金輪王銀輪王銅輪王鉄輪王なりなれども
のわるゝは四劫めてはしとてのはしらはれぐしくりきは三義
法数の十六はしらは迦葉仏の時女人は菩提ふりきとのゆるゝは
帝釋魔王梵王ぬれとそれと女の文殊とは
中半し
二世安乗は生死ゆゑ
今生ゆゑ名号とは無学雖ゆゑ
善人等和尚の釋迦牟尼仏ゆゑ
法しられば二世安乗とは法文は法也乃現世安穏後生善処とい
つるはとづゆり釋迦の浄土と安乗世とはふたつとは
ゆゑて二世安乗はくめとは山せさて安乗ゆゑ
無量のたのしみとは法は安乗世ゆゑ無量
利益無量罪
独獨孤師の寶王論は一会法華仏所説無量義とはふたつ

ありさまれば報恩とも会くふ八十億劫の罪をつくるとなり無量罪
とは遠いんれいみ量れ無量とは実ふずれんまてるるれども
なほさとりえんとて無量罪とふるるれば八十億劫とのべるも
例していまぐ劫数の人のいのちと無量業とへばよのべとなふふ
半こ世の人のんまこの八十億劫れ罪をつくるとなる経文をこて
念仏さへもきばたとるとの泥ひすれども生代の的師智恵の浅後
浅智愚及ひ妙叶師の念仏直接のごと死ハ元生れまよハ無量寿
大劫よりの流転るり一遍の念仏ハよりく八十億劫のつみをでハ
けさぬるるれば生ひ一生のなのごとるるれもそつこのたちる
もるづふ大海の一滴瓜の上乃土のごくもつくの罪悪のなほさ
るハ大地のおくるれば注生ハ中くるれるづのるれどもの

最後念の勇猛決定乃んよりゆ心ひ念仏のいきほひつよ死るれ
とへハ大力量の人の箭と疾風ふるるとてぬけ初るおとく臨終の念
仏心いたりてものづのさるなほなる罪とぶも即時に滅して往生
するゆと仏を浄土と死るるとも
餘浄れ後の世も縁後一変
知識決定往生一変利他倫理とわる
文めそ以ほん未法とへ報恩の御入滅後二千年れ後ハ
り一万年れのごハ末法しその一万年過ぎてのち一切れ法
浄もれりつぶるるもされどを時も縁後ぬ未れ一変ぐらい世に
のこりて衆生救利益するゆへとくへよまこうんとも無量寿経
ゲイハク タウライ トニ云南未ふこ世ニ浄土道滅尽セン我ハ慈悲哀愍特留ヒ此経

百歳説まへらざむ文字より此をハ当来の世とハ末の世の事之
されバ世のすゑになるまゝ人の善心も次第にかくろへるゆへに経教
我信ずる様もすくなくなれハ経の道もまた滅し尽なんとするを
りぬされど我ハ慈悲哀愍をもつて此経ばかりハ仏慈悲のちからにとゞめおき
杯に特り留此経止住百歳とて余経ハみなつきてもこの経ハ世に
の世にも念仏の法門といふことハ百年のあいだ往生をしめんとのこと
也此今にいたりて余経の後の世も弥陀一教とぞ仏紀説紀を
見ぬるに末代じめにハ般舟讃説般舟三昧経などをひろびてそれの留
に余経もみなひゆくと之物を何とぞ百年がいたらに無量寿経ばかりとゞまる
弥陀偈霊験経によりて往生業が為にたゞ独のありて人をすくふ
かくのごとく八万四千の名がありとも又此を法海

余縁にのぞきまして仏
八万諸聖教皆是阿弥陀仏釈尊一代の経をときたまひし衆生の機八
万四千のわるきにこそ対して八万四千の法門をとき給へ此ハ阿字
方三世仏弥字一切諸菩薩経字八万諸聖教皆是阿弥陀仏
とふ文なるされバ阿弥陀の字ぞり八万諸聖教阿弥陀の徳
とおもふべし恵心僧都正修観記に唱へ阿弥陀三字称
一万三百二十四巻一切聖教ともいふなりとぞ示されし
弄筆の菩薩
旧訳の金剛菩薩金剛菩薩の事とのたまふ
がさりの事とすれともそれハ大日の曼荼羅にある三十七尊の

の菩薩なれバ此の明王部の菩薩とおなじく色ハ赤きもとむるま
でもあるべし廿五の菩薩なども此れらも総てひとしく見ゆるぞすべて数よ明
王といふべきなるこゝ迄ハ浄土の明王乃菩薩と聞え迎の中にも
廿五の菩薩の事ハたゞしく此れ見えども来迎の菩薩極楽の聖衆
のうちにありといふ事ハ志らずと雖ども見えねバしらしめす答云前論理
文まで菩薩達のそれぞれの舞楽の役人に成るといふ事ハ見えねど
も無量寿経に説文ハあらず事に十方諸仏菩薩の徳を讃へ
供給しまつる事数しきまで云威徳を奏し天楽を鳴らし香華
歎家勝る者を供養し無量光と見るより又恵心僧都の観経
にも樹下聖衆ハ数す線作の楽を奏し奥深き乃至一部洞の指示二ハ始
一実中道の体を顕す洞洞の子に依ず万法皆空偏の者をもほのかの数よ

尚麻愛染明王等のごときも明王部の体をとゞめて絵の変なるへし
してわるゝにた

二十五の菩薩聖衆

廿五の菩薩といふ事ハ十住毘婆娑論一途の説あり極楽ハ無量光菩
薩のすべてのあるぞ現るればハ廿五をまでもそこむべきなれも
しかれども其名まちまちなる事ハまま廿五と定むべき事なきが
たゝるなれどもいにしへより浄土の絵にもかきつゝ廿五の菩
薩の役付ハ左のごとし
観世音菩薩蓮台ハ往生の人を抱く 大勢至菩薩合掌をもって表す
有理楽王菩薩ハ幢幡ハ不老不死 薬上菩薩ハ玉幡ハ
往行向地を護る 普賢菩薩幢蓋ハ掲挙 極楽往生文殊師利

菩薩の花鬘は美麗を尽す法華経は月蓋菩薩の説なり月蓋菩薩は四千一地の菩薩
なり月蓋菩薩の太鼓は打鳴す孝経の大鼓は打鳴す
不二の金剛菩薩の笛は吹は十界十如の妙法蓮華経菩薩の琴は吹は
四二門の引摩訶菩薩の琵琶は弾は曲は元品の無明を切る
菩薩の舞は神通の袖は一切衆生を招く仏子の吹は菩薩の乱拍子は
摂一座の菩薩の羯鼓は第一義諦の鄙音は仏海会の菩薩の和琴は
六度万行の打鳴す琴は教主釈尊の菩薩の笛は三世の山頂大妙法蓮華経
菩薩の鉦は有十八不共法鄙言宿世菩薩の漢音は八聖道の
弾は五逆罪菩薩の尺八は四向四果の高出音は金性菩薩の皆大歓喜
打鳴す金剛菩薩の焼香は天地四海に薫じ法界
唯心の打落す蓮花世界菩薩の宝華は座を界会の歌舞は
菩薩の伽陀は教は凡夫の聴聞は菩提の法は
みなこれらの衆は何様なれども
てをの人をもびとろくの上善人ろろ凡夫蓮花と云
紫雲たなびく
法鼓鳴りよりの戸ふりけれ
とんかさんは妻法灯孫よりものをうり
極楽世界をたのむ
西海後陸よりの他文法華経極楽
楽のさ波ゆゆしく海がゆゆしく名づけてごくらくとも云
安養界とも云みなの同じ
義無量の大菩薩妻月九明神の御依とや

慈悲の字はいかゝ書給ハ通今記云願覆メ衣出 授苦と
ハ名慈悲心と慈ハ授苦の義とて人のくるしまぬんとわれ
むし悲とハ字はれ義めてれ樂とはゝくるやとゝ後方便
とハを慈悲ハ衣覆ハ衣覆方ゝとそなゝのもをつゝみ
されハ誓願のかゝるのかゝるを作るゝ表月大明神ハすかハち慈悲
万行の菩薩の御誓願そとしゝ神祇者ハの世俗をとゝ
地をとりて云表月大明神或ハ号ハ慈悲万行ノ大菩薩とあり 同
抑ハ如ハ此の事をもゝ取神
神とゝ仏とゝひたゝ色水波の喩
水波とゝハもづゝみして本神ゝ波いゝと記てゝも用ゝ有覚
神と神なゝてゝを本地をたゝねをハ三昧万法の世界の覚

深法の後法ハ衣覆ハ衣覆の方ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ
成ゝして故神とゝ成ゝを用波とゝ成ゝてゝ成ゝ成ゝ成ゝ
ゝれハ神仏を水波とゝ成ゝ
和光の新廣く一神ゝ卯ゝ成ゝ
和光の新とハ仏のひゝをやゝ成ゝ
のゝゝゝ去契ゝ法ゝ一神ゝ卯ゝ成ゝ
ゝとハの三昧万法のひゝをやゝ成ゝ月万新ゝ成ゝ月乃ゝ
故万波の中ハ新をやゝ成ゝ
慈悲万ゝの和光の新ゝ卯ゝ成ゝ表月大明神と成ゝ
本後ゝ作ゝ成ゝ仏神ハ一神の乃ゝ
ゝ成ゝ同抑ゝの義理ゝ成ゝ

毎月二度は西方浄土より来迎引接の聖ひとあり
ましまし
元亨釈書より能忍聖とは偽称極楽世界へまゐりゆきて誓願
寺に弥陀仏を拝し半時ばかりいろいろ毎月西方浄土より来迎
ひかりとかがやき細雲半空にたなびくべし来迎引接の聖
の中第十九の誓願なり重病平癒あれとねがはば十八願
なほ来迎して極楽へ引導すべしゆゑに十八願
りもまさし
笠寺遍上人の孤雲来迎と為月のおとづれ
是は大江定基とて巻河守より任ぜられて人事よりこれの死後
の九品のあがりをねがひて発心をおこし名を寂

照とつかさどる入宋して夏法の人に会ひて名僧と意心
偽都ノ二十七条に雖因法夏入朝へ指条して法門参礼法師へ
故に大宋国にて夏人の名たかくなりぬ
しかるに仏祖統紀に明教契嵩の禄にくくたこそ天竺
別集に咸平三年日本国僧通大師寂照揚子江投楽橋に泥
法華と記せるはこの人の事なり
かりの夫なるやまれをなげてのちは長元七年にいたりて抗列まれ
ぬ迂化をうまつぐ除疫の場わかげてかぞへ最後乃
句は笠寺遍聴孤雲上人臨来迎義月前又偈メ私事同雲
の人はいかなる楽の言すなり人やらんとて年ゆくも
ひ給ふ人ハ多く浄土来迎を願まれ故の辞世なり笠寺とハ

五ツ菩薩の書かれ給へるくりからの中納言の浮屋敷の跡住吉
住吉明神までものせられたる事えそれを今の縁の未定う
樹のもと事よしくん
芝生霊山乃沖名ハ法花一佛とあ方丸弥陀ハ法花眼視元生
あらハ生て安楽平和往生三世利益国一舟
霊山ハ天竺の灵鷲山の事えこのあて佛法花経と云のも
今丸阿弥陀ハ未とい一舟えい一佛いまあ方のらぐ未といく連續
せ〜えい法花第三化城喩品よりハ色のひさうきいす〜へ
大海智勝如来とや佛中世〜のうの佛の仏弟子ハ十六人の
沙弥ハ沙弥ハりしぐれいづまもひ法花を唱へ〜て三上業提婆
成仏〜ものハ〜十方丸世〜ふれあて説法教化〜のうえを中

ものもの沙弥の成仏〜ものハ沙弥ハ未来ハ〜おりまた〜
ハ道成法花ハ西方二佛一名阿弥陀ハ法華法華の中八乳をおらうの
〜の阿弥陀如来ハすかりらいまあ丸法華ハくりくりる事ハ丸ハ
十劫ハ覚の弥陀と一舟ハ〜くりくりる事ハ丸ハ色のひさうきいす〜へ
阿の弥陀如来と弥陀経義疏ハ丸えとうハ弟子ハ丸ハ園通寺の科義ハ前去ハ
まびくふ丸ハ〜おりりハ十六沙弥の中の一佛いまあ方ハ示教〜
ものふ丸ハ法花一佛いまあ方の弥陀如来といくり用物ハ釈迦の
為説妙法の文とりて説教とそうハ丸ハ色眼視
元生とえハ法花著門ハの文丸ハ文の心ハ釈尊慈悲の眼とひ
らき元生とそうりて利益〜ものハこの丸ハ衆生ハ
ハ教〜て釈世尊とおのうまハ三世ハ〜ハ〜れども平利益

同一体とこそ三世とはむかしより聖人のおしへて法もとゝなづけ
るり今の文は法後の来とあり三世とは同物の説は用めべしと中ゝ法もは
るゞ世をりこまめて三世も同物の説もの用ゐるべし
法こそ法後は仏こそ報恩はいまゞ法もの用ゐるれは偽りの用ゐるべし
平等こそ仏法偽とこそはられども同一体と見説もみな南無
恵思禅師の云前世霊山和法花今世南方和法後濁世末代
報恩三世利益同一體と文よりはこれ恵思大師は天台大師の
御師匠なり〻聖法をあの仏おの生こ
為我滅仏
無量義経は役我得佛とはるとは長導は教念法門は法華は乳
の如大乳つゝはげられし〻解文はりその説は法華は

宮わりとれは無量義経とうをそ〻て為我滅仏とうをこ〻
れこそひも乳をまりてくゝ法はこそれば法後用位のひゝ法華
法とやをこ〻時は大乳を乳をとおこ〻て十四は乳は生代おまゝ〻法
衣せんとの御らひこそれば我滅仏とこそ
こそ不取正覚とは乳をりを生を法後の要乳とはや也
我力は行ゝ
天台大師の十疑論は十住婆論を引て自力他力とはゝ
我人は自力は成仏せんとするは行ゝ人の在をゆく
と記一目はあるとも浄土教主の在をるゝ人は行ゝ
也天幸菩薩は自力とはすから難し通入は
易し通とは法後仏の他力はたすけられて往生する人の乳業

てゆくがごとし星のとぎさをを交へ杳冥ともさびすゝや
かなるがごとし花ぐと稀なるまつ波の面のたゝ毫もそもるべ
御法の海無辺なれ棹はけくでも渡ぬるの岸よ
数位法師ゝ者よりこれ法の私ぐたのもきゝ人を
もはくで渡すとゝ必ひ高講餘録のを書し
十悪八逆のまゝひの雲も空をうれ無の月のあさも家と去
半壺ゝ

十悪とハ一ゝ殺生のゝ人ゝ盜ハ二人邪淫ハ三人妄語ハ四人
をももとさる事ゝ三ゝ偷盜とハぬすゝ也四ゝ両舌とハそら
おとゝ五ゝ綺語とハ花言ゝ六ゝ悪口とハ人をそしるゝ七ゝ
悪口とハ人の中の悪ゝ八ゝ貪欲とハ食物とのゝ
ゝ男女ハ生ん九ゝ瞋恚とハ腹立ゝ十ゝ
悪疑とハ見ゝ也ゝ
ゝ我ゝ元生者花士夫ゝ
邪のまゝひとゝ
ゝ八六和壇法の
ゝ浄土とゝ方十万八千
れゝこゝとのゝ
どゝ法ゝ
ゝ和ゝ
ゝ十方八千ゝ

説なり至北そのくりことは雲樵の法隆寺秘作寛三筆金
湯縁るべふ恵能の説とともとどけるみそもるべ一帯もさろべろ
を竹の中ふひ事と辯じかさうもさて表の月とかんてのひ
祥のうられ水性仲いまとにしていろうるくれ生のひ
ようるひてそむねかるまかとかまとと月のはうろうみてあ
入るたるし変とさるとと〜どとか去此不変とて報恩乃
説るうりとふ安楽の事し法隆の浮土もこの安楽をとるう
ととろうねしぬるるの報恩物家初ようひ心性のうちに法佛
の浮土と異延してはうさるくハ何ともかとけ意現しまりんや
延心延れとこの強ようるかが報法の妙ふしこの理とねずんハ云ひ
不変の石程ふいろうるべしとし同初ようる若存れ疏の主ふて浮

れどもとうとうひふかるひびう〜表妙の月のあるとひのらま
又唯心の浮土と又法より見出び妙家初のはうひがよくけう
ふひようるう
唯心の浮土
唯心の浮土と又法るを人ふかはく〜んなて報ひ文毋所生
の関分のうらはる心法がすから浮土みて別ん浮土ハふに
明りとりるうらのはうそれハ事のふるまふひふそも唯心の浮
土とりる心ハ報このか心とりふものハ十方法界尼尼のふまで
もはまく通じてうるものるまとどもまふ加ふひ分の方
すのうちだり心法とふたたんハ中風の病をけて分の不化
らのちのが又仲のうちを報分とまうざるがくくう今みそも高起

こゝのたきゝそく成仏の脱するとゝ凡夫は自力の有の浄土ぐもと法
界衆生の為の法界大地法界虚空こゝかんのゝら
みてこそ世界のうみ浄土とゝ為へ為る所深後世未の御恵を
かゝらしぐ心中あてかりまんしを唯心の浄土とゝ
とも優曇華樹の十界十心三種世間五眼メ而乳則安養
西土捨此何求北但浄土唯心蓋地獄モ亦唯心ナリ矣と
称せゝまゝと凡夫は唯心の浄土とゝうんるて後り聖
国ゝ〻びい唯心の地獄色又同ゝ為ゝ
同休ぐ浄土文天ゝ浄土或心雲雷雨
寸の念仏直指浄土生之生論注飯元直指浄土蓮華大
依仰ノ浄土指掌通宗宝徳法後蓮花漢天師

浄土境観要門ゝ唯心の浄土のうをゝ法せりめこゝふ
ゝる同ゝ

正德四甲午年仲夏良辰

洛陽書林　淺見吉兵衛

野、宮口
誓願寺